随想 一枚の写真

上杉清喜
（会員・佐伯市中川原）

もう十年程も前のことであろうか、佛壇の横の物入れを整理していたところ、色褪せた一枚の写真が出て来た。紛れもなく祖父のものである。日清戦争を現役で戦い、日露戦争には二人の子供（筆者の父（六歳）と叔母（五歳）共に故人）を残して予備役で出征したというから、三十歳台のものであろう。当時大分には聯隊はなく熊本で写ったものと思う。若い頃の祖父の写真はこれが一枚あるだけで、明治五年生れの祖父にしては兵隊に行ったお陰で?残っているのであろう。よく絵で見る肋骨入りの凛々しい軍服姿である。跡取り（筆者の父）に先立たれ小生の復員を待ちかねて昭和三十五年他界したが、この一枚の写真を通して若かりし頃の否、年老いてからまでの波瀾に満ちた祖父の七十九年の生涯に思いを馳せる時、様々の追憶に耽ける。それは数限りなく展開してくる。そして今その写真なるものの何と多く氾濫していることか、結婚式に、運動会に、旅行に、等々写さねば損だといった調子でパチ〳〵パチ〳〵と。でもこの式のヤツは単細胞の私には見終えたらそれでおしまいで、何とも余韻がない。

さて、話は一転海崎の羽木衛守さんが去る三月九十三歳の天寿を全うされて鬼籍に入られた。今では会誌も郵送されて来ますが氏の御元気な頃は、八幡西上浦分は一括して羽木さん宅へ届けられその都度西上浦分は、小生方まで自転車で持って来て下されいつも欠席がちの小生にこまごまと会の様子を伝えて下さっていた。その羽木さんが128号（昭和五十四年）に「芋といわし」と題して載せられたことがある。私の記憶では之が羽木さんの初めてのそして最後のたった一度きりの投稿であったような気がする。平易な肩の凝らない一頁半位のものであって幼稚な頭の小生には、何とも爽やかな響きのよい文章であった。

たった一枚の祖父の写真と、たった一度きりの羽木さんの遺稿とが二重写しに重なってどの写真よりも、どの投稿よりも強く〳〵胸に迫ってくる。

おそくなりましたが誌上を借りて先輩会員羽木さんの御逝去を御知らせし御冥福をお祈り申し上げます。